

あけぼの た ろう
第64代横綱 曙 太郎

横綱になる人って、自分の相撲に対して満足がないんですよ。満足が出てしまった時に引退するんです。

僕が入門した昭和63年春場所は、思えば特別な人たちがいっぱい入門した場所でした。

若花田（第66代横綱若乃花）、貴花田（第65代横綱貴乃花＝現貴乃花親方）、魁皇、和歌乃山（現山分親方）、力桜（現プロレスラー力皇）ら、11人も関取に昇進したんですよ。そんな年って、めったにないんです。

そもそも僕は、ハワイの高校生時代バスケットをやっていて、たしかに体力的にはまあまあ自信はあったんです。バスケットでハワイの大学にも進んだんですけど、コーチとの対立があって、途中で辞めてしまった。

そんな時、同じハワイ出身の東関親方（元関脇高見山）との出会いがありました。でも、本当は親方は僕の弟を力士にしたかったんですよ。大学を中退して18歳の僕より、年も若いしね。でも、弟は気が

進まなかったようで、最後は「しょうがないよ、兄貴を連れていく」という感じで、僕が日本の相撲界に行くことになったんです。

母親は大反対です。なぜか親父は「行け、行け」って。入門前、親父と僕と二人きりでしゃべっていると母親が間に入ってきて、「絶対におまえを日本に行かせないよ」と言われ続けたものです。そんな母の反対もあったので、日本にやってきた時には、「とにかくもうハワイには帰れないな」と思いましたね。

「帰れない」と思ったのには、もう一つ理由がありました。

フットボールとかバスケットとかで素質があるハワイの選手が、本土の大学にスカウトされてアメリカ本土に行くケースって、けっこう多いんですよ。でも、たいていは本土の人たちと性格が合わなくて、1年以内にハワイに戻ってきてしまうんです。出戻り組に、ハワイの人たちはボロクソに言うの。

「いったい何しに（本土に）行ったんだ」とか、「お金がもったいない」とか、そう陰口を言われている人を、僕も何度も見ているから、親父と母親にはそういう思いをさせたくない。もう、それだけの思いでしたね。

入門してすぐ、大阪での春場所は、大海という四股名で前相撲を取りました。その時から、すでに若貴兄弟はマスコミ、ファンの注目的です。ハワイからやってきたばかりの僕は、最初、なぜ若貴兄弟が騒がれているのか、理由がわかりませんでした。

春場所が終わって東京に戻ってきて、僕たち新弟子たちはみんな、国技館の中にある相撲教習所で相撲の基礎を学びます。もうその時から、若貴兄弟はまったく別でしたからね。それこそ、僕みたいな相

撲経験のない者がイチからやらなくちゃいけないことは、すでにクリアしていて、教習所の先生たちと稽古していたんだから。先生は現役の幕下や三段目の力士たちなんですから、その力の違いがわかるっ
てものですよ。

スタートラインが全然違うな……。

それが僕の印象でした。でも、入門した限りは彼らを追いかけなければいけない。追いかけるためには、一生懸命やるしかない。その当時を振り返れば、新しい番付が発表されて、序二段に上がった、三段目に上がったといううれしさは、ほとんどなかったですね。とにかく若貴兄弟を追い越す、それが目標。

若貴兄弟はもちろん別格でしたけど、もう一人すごい人がいました。教習所の生徒たちで、トーナメント戦をさせられるんですが、しょっちゅう優勝していたのが和歌乃山（現山分親方）。中学横綱のタイトルを引っさげて入ってきて、体はさほど大きくないんだけど、もう手がつけられないほど強い。和歌乃山は入門して半年くらいで、教習所の先生たちと同じくらいの番付まで出世していました。中学を卒業して入門した力士で、そんな人はおそらくいないんじゃないかな？

話は戻って、序の口の番付に載った63年夏場所の6日目の3番相撲で、初めて僕は貴花田と対戦しました。

さっきも言ったように、ハワイでスポーツをやっていたといっても、相撲独特の動きというのは、相撲を取り始めてほんの2～3カ月で身につくものではありません。まったくダメだったんです。あるのは、「負けたくない」という気持ちだけ。

貴花田との初対戦の朝、僕が部屋を出る前に、師匠のところに「これから場所に行ってきます」と、挨拶をしに行ったんですね。そうしたら師匠が、若干言葉は違っているかもしれませんが、

「せいぜいがんばってくれよ。負けても仕方ないよ。相手のほうがちっちゃい時から相撲を取ってるんだから」

みたいなことを言ったんです。

師匠だって、僕に勝ってもらいたいのはヤマヤマだったと思います。若貴兄弟のお父さんの大関貴ノ花関は現役時代、師匠とライバル同士だったと聞いているし、引退して部屋を持ってからも、弟子同士が対戦するという因果。

だからこそ、貴花田に負けたら部屋に戻れないだろうと思っていましたね。初めての対戦は僕が勝ちました。支度部屋に戻って、そのままさっさと着替えて、走って部屋まで帰ったんです。力士はその日の対戦が終わると師匠に、勝敗を報告に行くのですが、僕は胸を張って師匠のところに行って、「今日、勝ちました」って言おうと思っていたんです。

それで、部屋の玄関に着いたら、師匠がわざわざ3階の自室から降りてきて、僕のことを待っていてくださったんです。あとで聞いたら、僕の相撲を見ていた別の親方から師匠のところに電話があって、僕が勝ったことを知らされたんだそうです。

僕が勝利の報告をする前にギュッと抱きしめられて、「おまえ、今日勝ったんだって！」って言われて……。その時のうれしさって言ったらないですよ。相撲の素質はないかもしれないけれど、僕がやっていることは間違っていない。だから、師匠を信じて付いていくしかないと思った瞬間でしたね。

それと同時に、この時の貴花田戦は、僕の相撲人生の中で一番大切な一番になりました。まさにこの相撲が原点ですね、僕の。

それからの毎日は、若貴兄弟を追い越すための稽古です。

優勝とかはできなかったけれど、ちょうど1年で幕下にも上がれました。そして、平成2年初場所、幕下東2枚目で4勝して、次の春場所新十両に昇進しました。その時、ライバルの貴花田はひと足先に十両に昇進していて、僕と若花田が同時昇進です。なにかの縁だと思っし、ますます僕の気持ちは燃えましたね。

十両になると、それまでの大部屋から一人部屋に移ることができます。給料ももらえるし、付け人も付く。1800円で飲み放題の店に行っていた生活とは正反対の生活になりました。でも、「上がってうれしい」なんていう気持ちは、ほんの1週間くらいで、場所後の休みが終わって稽古が始まると、すっかりそんな気持ちは吹き飛んでいました。だって、貴花田はもうすぐ幕内に上がろうとしているんだから、十両くらいで喜んだりなんかできないですよ。

それから半年で幕内に上がれました。

毎場所のように、若貴兄弟との対戦がある中で、敢闘賞や殊勲賞などをいただいて、毎日が夢中でしたね。場所中、たとえば若貴兄弟が僕より先に相撲があるとするでしょう。あの二人が勝つと、もうそれだけで「自分も負けられない」という気持ちになるんですよ。僕が先に相撲を取って勝つと、向こうだって負けたくない。だから、見ているファンの方たちもおもしろかったんだと思うんです。

それと、これは表立っては言えなかったけれど、僕ら3人にはなんか使命みたいなものがあったように思います。普通、新入幕の力士であれば、7番、8番勝てば「まあよかったな」みたいなところがあるんですが、僕らの場合は8勝、勝ち越しなんかじゃ許されない。10番くらい勝って、ようやく「まあまあよかった、合格点」、みたいな感じだったわけです。それくらい、周囲の期待はものすごいものがある。でも、それに応えて、それでも満足できない僕らがいたんですよ。

とにかく平成3、4、5年という時は、相撲ブームの絶頂期と言ってもよかったんじゃないかな？ 毎場所毎場所がすごい盛り上がりで、国技館にもお客さんが大勢いらしていました。でも、ただ相撲が人気があったというだけじゃなかったと、僕は思うんです。あの頃に相撲を取っていた、それぞれの力士たちが作り上げた相撲人気なんですよ。

もちろん、若貴兄弟の人気はすばらしかったけれど、他にも小錦さん、琴錦(現荒磯親方)さん、貴闘力(現大嶽親方)さん、安芸乃島(現高田川親方)さんといった個性的な人たちがいて、どの一番を見てもおもしろかった。その後、学生相撲出身の舞の海とか、智乃花(玉垣親方)たちが上がってきたし、小兵力士では寺尾(鍛山親方)さんも活気あふれる相撲を取っていました。寺尾さんなんか、その後上位で取っていた若貴兄弟、僕とかと対戦して、いつも惜しい相撲を取るわけです。お客さんもそういう相撲を見ていたら喜んでくださるわけですよ。

それと当時は、花道とか支度部屋とかの雰囲気も怖かったです。負けた力士が支度部屋に帰ってくると、特に先輩力士なんかの場合は、挨拶をしても目は合わせないですもんね。今、僕が見ている限りでも、そういう緊張感が花道や支度部屋にないように思うんです。負けても、チャラチャラ笑って帰ってきてる。そんな態度は許されなかったですよ、その頃は。

真剣勝負なんです。力士が心から真剣に相撲を取れば、見ているお客さんにも伝わるんですよ。無理矢理、人気を作り上げているわけじゃない。

平成4年夏場所、関脇で初優勝したことは大きな転機になりました。

幕内最高優勝というものを味わってみて、なんでみんなが苦労して、汗をかいて稽古するのかということが、初めてわかったような気がしたんです。優勝賜杯を抱いて、その重みも感じました。優勝の翌場所、大関に昇進したんですが、その場所の稽古で右足の小指を骨折して、休場。

僕にとって、初めての休場でした。そして、屈辱でした。なんとか次の秋場所には出場しましたが、中盤で貴闘力さんや貴花田に負けて5連敗。自分がふがいなくて、あの時は吐くまで飲みましたよ。あんなに飲んだこともないかもなあ。

でも、その時の悔しさに耐えたことが、翌場所、翌々場所の連続優勝につながったんだと思います。2場所連続優勝で、横綱昇進が決まりました。僕はライバルの若貴兄弟よりも先に横綱になることができたんです。

関脇で優勝して1年も経たない間に、横綱昇進。これには自分でもビックリしましたが、すんなり昇進できたのは、貴花田の大関昇進についてかなり厳しい見方があったことが伏線になっていたと思うんです。

大関、横綱に昇進するには、一定の基準があります。たとえば大関昇進なら、3場所で33勝を上げるとかなんですけれど、貴花田はそれなりの成績を上げているにも関わらず、そのつど大関昇進を見送られていました。普通は気持ちがあへこみますよね。どんなに強い力士でも、壁にぶつかる時ってあるんで

すよ。壁にぶつかって、それをぶち抜いていける人が、本当に強くなる力士だと思います。貴花田の場合は、協会の中の壁があったと思うし、僕の場合はケガが最大の壁だったと思いますね。あれだけ昇進を見送られても、あきらめずに自分の力でぶち抜けた貴花田だったからこそ、その後あれだけの大横綱になったんだと僕は思いますね。

今でも思い出すのは、僕の横綱昇進がかかった平成5年初場所千秋楽、貴花田との一番です。かたや貴花田は、大関昇進がかかっている。僕が負けたら、優勝決定戦にもつれこんでしまう。貴花田との対戦成績は、僕はそんなによくない。最終的には21勝21敗と五分五分だったんだけど、この時は横綱昇進云々じゃなくて、貴花田という男に負けたくない、それだけだったですね。

貴花田も僕も、よくあんな状況で相撲取ったなあ。今でもたまにその時のビデオを見ることがあるんだけど、裁いている行司さんの声も聞こえないくらいの大声援だったもんね。あの場面、冷静に相撲が取れた自分が不思議です。時間いっぱいになって、最後の塩を取りにいった花道の奥を見たら、ウチの部屋の若い衆たちがものすごい興奮した顔つきで、僕の土俵を見つめている。貴花田側の花道もそういう状態だった。

横綱昇進の直前の一番が、貴花田とやれてよかった。あれで勝ってなかったら、横綱に昇進するのに、正直もっと時間がかかったと思っているくらいです。

その後、貴乃花も横綱に昇進するんですが、その間の2年弱は一人横綱でした。

最近では、白鵬が横綱に昇進するまで、朝青龍が長い間一人横綱を務めましたけど、一人っていうのは、なかなか難しいものなんです。アドバイスをしてくれる人はいるんですが、相撲を取ったことがあ

る人というわけじゃない。「俺は30年間相撲を見てきたから、わかるよ」と言ってくれるんですが、横綱を1日でも務めてみなければわからないことって多いものなんです。かと言って、横綱まで昇りつめた人たちは、表に出てアドバイスをするようなタイプの人たちではないので、自分で転びながら、自身で答えを探していかなければならないんです。

どれだけの責任があるか、ということは言葉で言い表わせるものではありません。たとえば地方巡業などで、足を骨折していたとしても、歩けるのであれば横綱土俵入りをやってくださいとか、そういう要望もあります。巡業は普段本場所を見に来られない人たちが、1年も2年も楽しみにしてやってくるわけです。僕らを見たくて待っているお客さんに、「痛い」とか、「できない」とかなんてことは言えないんですね。

横綱は協会の看板です。僕も一人横綱時代、ぎっくり腰で歩くのもやっとの時に、花道まで若い衆の肩を借りて、なんとか土俵入りだけはこなしたという時がありました。それに、貴乃花の膝だって、相当悪かったはずですよ。みんなが想像する以上に悪かっただろうし、痛みも尋常じゃなかったはずです。引退する直前にも彼は膝をケガしましたが、普通なら次の日、相撲など取れる状態じゃないんでしょうけれど、テーピングをぐるぐる巻きにして土俵に立った。これも、横綱としての責任があるからです。そして、精神力が強いからできることなんです。

朝青龍も、一人横綱のあの時期、お金では買えない勉強をしたはずですよ。現役でいる間は、たぶんそんな心境になったりはしないと思うけれど、引退してみて初めてそういうことに気づくんじゃないかなあ、って思うんです。

ケガという意味では、僕も横綱になってから膝や腰といろいろな箇所をやりました。辞める前は、本当にケガとの戦いという感じでしたけど、そういう意味からいろいろ考えさせられることもありました。

たとえばアメリカのプロスポーツや、日本のJリーグにしても、選手がケガをすると、チームが治療の段取りをしてくれるんですね。でも、同じプロスポーツでも大相撲の力士の場合は、自分で全国を歩いて、自分で探して自費で治さなければいけない。勝負はケガと隣り合わせです。ケガを抱えていない力士などいないと思います。

それで、僕はどれだけヘンな人たちに会ったことか。

今では笑い話ですが、「このパッチを貼って、お祈りしたら治りますよ」とか、ちょっと患部を触っただけで、「ハイ、これで大丈夫です」とか、不思議なことがありました。それで治療代が1000万円、なんていうこともありました。僕たちは、もうなんとしてでも治して、土俵に立ちたいという気持ちから、黙って払ってしまうんだなあ。さすがに、1000万円は払い切れなかったけど……。

そういうことも経験して、僕は「忍」という気持ちを学びました。

横綱になる前までは、色紙に文字を書く時には「心」という字を書いていたんですが、昇進後は忍耐の「忍」にしました。多少のことで心が揺れる人では、横綱は務まらない、そういう思いからの言葉です。

たぶん、僕だけじゃなくて若貴兄弟や朝青龍もそうだと思うんですけど、気付いたら横綱になっていた、そんな感じだと思うんです。「横綱になりたい」とかじゃなくて、とにかくライバルと競い合ってた、気付いた時には、横綱になっていた。だから、番付が上がっていても満足感はなかったし、横綱に上がってからも満足感はなかったです。

自分は常に夢を持ち続けました。優勝を10回以上はしたい、子供ができれば子供を抱いて優勝記念の写真を撮りたいとか、そのつどいろいろあって、それをクリアしていった。

ケガで休場が続きましたが、目標、夢だった10回目の優勝（平成12年名古屋場所）を果たした時、初めて、ある程度自分で満足したんです。だから、引退してもいいかな……と思いました。

でも、その時思ったんです。もう少しだけガマンしてみようと、満足感というものを得てからは、あれだけつらかった相撲がおもしろくなってきて、次の秋場所で13勝を上げて、九州場所では14勝1敗で11回目の優勝をしたんです。最後の最後でこんな気持ちになるなんて、本当に相撲というものは不思議だと思います。

横綱を丸々8年間務めました。なんのためにがんばっていたんだろう？ ケガをした時の頃のことを振り返っても、よくやったなあ……なんて自分でも思います。結婚して、子供が生まれたことも、もちろん励みになった。家族のためにと言う気持ちも強かったと思います。でも、僕が思うに、自分のために一生懸命できない人って、人のためにもできないと思うんですよ。逆に、調子がいい時は「子供のため、奥さんのため」なんて言えるんだけど、ダメな時はそんなことは言えない。すべて自分のため、というか自分の責任でしかないんだということに気がきました。

僕の現役時代と違って、今はモンゴル力士やヨーロッパ勢の力士が数多く活躍しています。外国人力士は部屋に一人だけという原則がありますが、僕個人としては一人だけなんて言わないで、全面的に開放したほうがいいと思っています。本当に真剣に、日本に来て相撲を取りたいという人であれば、断るべきではないと思うんです。メジャーリーグだってそうでしょう？ 国籍は関係なくウエルカムではあ

るけれど、上下が本当に厳しい世界です。その中でイチロー選手みたいな人が出てくるから、意味がある。

だから、来たい人はどんどん入れるようなシステムでいいと思います。僕らの頃は逆に人数のシステムじゃなかったんで、東関部屋や高砂部屋に複数のハワイ出身力士がいました。システムを作っても、辞める人は辞める。将来の相撲界を考えた場合、システムをあまり硬くしないほうがかえっていいんじゃないかというのが、僕の持論です。